SUBSTANCE FOR IMPROVEMENT OF TASTE

Patent number:

JP3190899

Publication date:

1991-08-20

Inventor:

KURIHARA YOSHIE

Applicant:

KURIHARA YOSHIE; ASAHI DENKA KOGYO KK

Classification:

- International: A23J1/14; A23L1/03; A23L1/22; C07K14/415; A23J1/00;

A23L1/03; A23L1/22; C07K14/415; (IPC1-7): A23J1/14;

A23L1/03; A23L1/22; C07K13/00

- european:

Application number: JP19890330794 19891220 Priority number(s): JP19890330794 19891220

Report a data error here

Abstract of JP3190899

NEW MATERIAL: A substance for improvement of taste having an amino acid sequence represented by the formula. USE:A sweetening substance for foods, beverages, feeds, pet foods, medicines, etc. PREPARATION: For example, water is added to sarcocarp of gluculigo latifolia and the resultant mixture is homogenized. The homogenized mixture is centrifuged and the resultant precipitate is collected. To the collected precipitate, 0.5N sodium chloride is added followed by homogenization. The homogenized material is centrifuged and a supernatant is collected. To the collected crude extract, ammonium sulfate is added till the concentration is 80% saturation and the generated precipitate is separated by centrifugation. The separated precipitate is then dissolved in 0.01M phosphate buffer solution and the obtained solution is subjected to an ion-exchange chromatography. The adsorbed substances are eluted by the linearconcentration gradientelusion method using 0-1.0 M sodium chloride solution and the eluted active fraction is treated using the molecular sieve chromatography method and purified, thus obtaining the objective substance for improvement of taste having an amino acid sequence of the formula.

Asp Asn Val Leu Lau Ser Gly Gln Thr Leu!*

His Ale Asp His Ser Leu Gla Ala Gly Alexe

Tyr Thr Leu Thr fie Gln Asn Ase Cys Asn²⁰

Leu Val Lya Tyr Gîn Asn Gly Arg Gla Lig⁴⁰

Trp Ala Ser Ase Thr hap Arg Arg Gly Ser⁵⁰

Gly Cys Arg Leu Thr Leu Leu Ser Asp Gly**

Ase Leu Val He Tyr Asp Ris han Asn**

Asp Val Asn Gly Ser Ala Cya Cys Gly Asp**

Asp Cly Lya Tyr Ala Leu Val Leu Gin Lys**

Asp Gly Arg Phe Val He Tyr Gly Pro Val'**

Leu Trp Ser Leu Gly Pro Asn Gly Cys Arg''*

Arg Val Asn Gly**

Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

⑩日本国特許庁(JP)

① 特許出願公開

® 公開特許公報(A) 平3-190899

⑤Int. Cl. 5	識別記号	庁内整理番号	❸公開	平成3年(1991)8月20日
C 07 K 13/00 A 23 J 1/14 A 23 L 1/03	ZNA	8619-4H 7236-4B 6977-4B		
// A 23 L 1/22	ZNA Z	7823—4B 6977—4B	A 23 L 1/03	,
		· a	F 查 請求 未請求	請求項の数 1 (全12頁)

②発明の名称 味覚修飾物質

②特 願 平1-330794

20出 願 平1(1989)12月20日

 ⑩発 明 者
 栗 原
 良 枝
 東京都世田谷区奥沢7-4-7

 ⑪出 願 人
 栗 原
 良 枝
 東京都世田谷区奥沢7-4-7

⑪出 願 人 旭電化工業株式会社 東京都荒川区東尾久7丁目2番35号

個代 理 人 弁理士 羽 鳥 修

月 知 書

1. 発明の名称

味覚修飾物質

2. 特許請求の範囲

下記のアミノ酸配列を有する味覚修飾物質。
Asp Asn Vai Leu Leu Ser Gly Gln Thr Leu'。
His Ala Asp His Ser Leu Gln Ala Gly Alaz。
Tyr Thr Leu Thr Ile Gln Asn Asn Cys Asn。
Leu Val Lys Tyr Gln Asn Gly Arg Gln Ile。
Trp Ala Ser Asn Thr Asp Arg Arg Gly Ser。
Gly Cys Arg Leu Thr Leu Leu Ser Asp Gly。
Asn Leu Val Ile Tyr Asp His Asn Asn Asn 7。
Asp Val Asn Gly Ser Ala Cys Cys Gly Asp.。
Ala Gly Lys Tyr Ala Leu Val Leu Gln Lys。
Asp Gly Arg Phe Val Ile Tyr Gly Pro Vall。
Leu Trp Ser Leu Gly Pro Asn Gly Cys Arg.。
Arg Val Asn Gly...

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は、クルクリゴ・ラチフォリアの果実か

ら分離した味覚修飾物質クルクリンを、さらに精 製して得た高純度の味覚修飾物質に関する。

〔従来の技術〕

舌の受容膜に作用して、食品の味覚を変える物質(味覚修飾物質)としては、従来、口中に含んだ後、甘味物質を食した時、または甘味物質とともに食した時、甘味を感じさせなくするものとしてギムネマ シルベスタ(Gymnema sylvestre)の葉に含まれるギムネマ酸、及びなつめ(Ziziphus jujuba)の葉に含まれるジジフィンが知られており、また上記と同様にして酸味物質を食した時、甘味を感じさせるものとして、ミラクルフルーツ(Synsepulm dulcifiaum)の実に含まれるミラクリンが知られている。

上記のミラクリンは、上述の如き機能を有する ものであるが、安定性上の問題があり、味覚修飾 物質として実用化されていない。

また、クルクリゴ ラチフォリア(<u>Curculigo</u> <u>latifolia</u>)は、西マレーシアやタイ南部等に自生するひがんばな科きんばいざさ属の植物であり、

その果実は食用に適し、食欲増進効果があること は知られているが、それ以外の性質については知 られていない。

[発明が解決しようとする課題]

本発明者らは、先に、クルクリゴ・ラチフォリア (Curculigo latifolia) の果実またはその乾燥物から 0.01 M以上の濃度の塩の水溶液で抽出することによって得られる蛋白質 (クルクリンと命名) は、これを食した後、水または酸味物質を飲食すると、甘味を感じさせる味覚修飾効果を有する蛋白質であることを見出した(特顧昭 6.3 - 1.5.3.1.4.3 号及び特願昭 6.3 - 2.7.7.7.1.7 号)。

本発明は、上記クルクリンを高度に精製した高 純度のクルクリン(以後、高純度クルクリンとい う)からなる味覚修飾物質を提供するもので、そ のアミノ酸配列も決定されたものである。

〔課題を解決するための手段〕

本発明の味覚修飾物質は、次のアミノ酸配列を 有する。

3

になるまでこの水洗操作を繰り返し、沈渣を得る。 どの上清にも、味覚修飾活性はない。

続いて、得られた沈渣を0.01 M以上の濃度 の塩の水溶液で抽出して、クルクリンを含む粗抽 出液を得る。

Asp Asn Val Leu Leu Ser Gly Gln Thr Leu'°

His Ala Asp His Ser Leu Gln Ala Gly Ala²°

Tyr Thr Leu Thr Ile Gln Asn Asn Cys Asn³°

Leu Val Lys Tyr Gln Asn Gly Arg Gln Ile⁴°

Trp Ala Ser Asn Thr Asp Arg Arg Gly Ser⁵°

Gly Cys Arg Leu Thr Leu Leu Ser Asp Gly⁴°

Asn Leu Val Ile Tyr Asp His Asn Asn Asn⁴°

Asp Val Asn Gly Ser Ala Cys Cys Gly Asp⁴°

Ala Gly Lys Tyr Ala Leu Val Leu Gln Lys°°

Asp Gly Arg Phe Val Ile Tyr Gly Pro Val'°°

Leu Trp Ser Leu Gly Pro Asn Gly Cys Arg¹¹°

Arg Val Asn Gly¹¹⁴

以下、本発明の味覚修飾物質について詳述する。 本発明の味覚修飾物質は、例えば、次のように して得られる。

まず、クルクリゴ・ラチフォリアの果実又はその果肉に、水を加えてホモジナイズし遠心分離する。この時上清は、濃い褐色を示す。さらに、この沈渣に当初の果実又はその果肉と等量の水を加えてホモジナイズし、遠心分離する。上清が無色

上記塩の水溶液による抽出手段の一例をあげると、次の通りである。上記水洗操作後、得られた 沈渣に塩化ナトリウム水溶液を加えてホモジナイ ズし、遠心分離又は濾過を行って、クルクリンを 含む粗抽出液を得る。

次いで、上記のクルクリンを含む粗抽出液を以下の通り精製し、高純度クルクリン (本発明の味覚修飾物質)を得る。

上記粗抽出液の精製は、硫酸アンモニウム、硫酸ナトリウム、リン酸カリウム、硫酸マグネシウム、クエン酸ナトリウム、塩化ナトリウムなどで塩析し、通常のクロマトグラフィーによって行うことができる。一例としては、硫酸アンモニウムで塩析して得られた沈澱を、CMーセファロースイオン交換クロマトグラフィーにかけることによって、高純度クルクリンが得られる。

高純度クルクリンのアミノ酸配列の決定は、該 高純度クルクリンをトリプシン、キモトリプシン、 リシルエンドペプチダーゼ等の酵素で加水分解し た後、水系の逆相のカラムを用いHPLCで各ペプチドフラグメントを精製し、さらに、このペプチドフラグメントの構造を決定することによって行う。

又、高純度クルクリンは、前記のアミノ酸配列を有するので、このアミノ酸配列通りに、適当な合成方法、例えば、固相合成、部分固相合成、フラグメント縮合又は溶液合成によって合成してもよいし、適当な宿主を選び、組み換え DN A 技術を用いても得ることができるものである。

(実施例)

実施例1 (水洗および塩化ナトリウム水溶液による抽出)

クルクリゴ・ラチフォリアの果肉30gをとり40㎡の水を加えてホモジナイズし、遠心分離(12,500rpm、60分間)した。この上清は褐色を示し、味覚修飾活性はなかった。さらに得られた沈流に、40㎡の水を加えてホモジナイズし、遠心分離(12,500rpm、20分間)した。この上清は、無色で、味覚修飾活性はなか

7

0. 01 Mリン酸製街液 (PB 6. 8) で素通り 画分を除去した後、塩化ナトリウム溶液 0~1. 0 Mの直線濃度勾配溶出法でクルクリンを溶出した (流速 5 ㎡/1時間、1分画 5 ㎡、全溶出液量 5 0 0 ㎡)。溶出した蛋白質は2 8 0 nmの吸収に よりモニターした。その結果を第1図に示した。 第1図に示すピーク (B) が味覚修飾物質クルク リンを含む画分である。

実施例4 (分子ふるいクロマトグラフィー)

実施例3で得られた、第1図のピーク(B)の 斜線部分に示された画分に、80%飽和になるように硫酸アンモニウムを添加して活性物質を析出させた。これを遠心分離(32.000rpm、60分間)して得た沈霧を、1.5 m2の0.01 Mリン酸緩衝液(PH6.8)に溶解した。この濃縮液をセファデックス(ファルマシアLKBバイオテクノロジー社製)G-100カラム(直径1.6 cm×58 cm、ベッド体積160 m2)を用い0.5 MNaC1を含む0.01 Mリン酸緩衝液(PH6.8)により分離した(流速8.4 m2/

った。

次に、得られた沈渣に0.5 M塩化ナトリウム水溶液を加えてホモジナイズし、遠心分離(30.000 orpm、60分間)した。得られた上清は、無色で、味覚修飾活性を示した。さらに、40 mの0.5 M塩化ナトリウム水溶液による抽出操作を3回繰り返し、これら3回分の上清を合わせ、クルクリンを含む粗抽出液を得た。

実施例2 (硫酸アンモニウムによる塩析)

実施例1で得られた粗抽出液に、80%飽和になるように硫酸アンモニウムを添加して活性物質を折出させた。これを遠心分離(32,000rpm、60分間)して得た沈澱を、100m2の0.01Mリン酸緩衝液(PH6.8)に溶解した。実施例3(CM-セファロースイオン交換クロマトグラフィー)

実施例2で得られた溶液を、CM-セファロースCL-6B-カラム(直径2.2cm×18cm、ベッド体積68mk、ファルマシアLKBパイオテクノロジー社製)に流し吸着させた。続いて、

8

1時間、1分画2.8 mm、全溶出量182 mm)。 蛋白質は280 mmの吸収によりモニターした。その結果を第2図に示した。第2図に示すピーク (A)が味覚修飾物質クルクリンを含む画分である。

参考例1 (SDSーポリアクリルアミドゲル電気 泳動)

実施例4で得られた、第2図のピーク(A)の 斜線部分に示された画分の物質の純度および分子 量を、8M尿素を含む、SDSーポリアクリルア ミドゲル電気泳動により確認した。

その結果、分子量12,000ダルトン(dalton)のところに単一パンドを示したことから、第2図のピーク(A)の斜線部分に示された画分の味覚修飾物質クルクリンは、純品であることが確認できた。

クルクリゴ・ラチフォリアの果肉30gから得られた、各クルクリン画分の蛋白質含量、活性収率及び精製度は下配第1表に示す通りである。

尚、蛋白質含量は、ローリー(Lowry)ら

の方法により測定した。

第1表 クルクリンの各精製段階における 蛋白質含量、活性収率及び精製度

精 製 段 階	蛋白質含量 (g)	活性収率 (%)	精製度 (倍)
果 肉	3 0 *1	100	1
0.5 M食塩水抽出物	0.106	8 0. 0	225
CM-セファローズ 溶 出 画 分	0.018	5 5. 5	940
セファテックスG-100 溶 出 画 分	0.0086	3 6. 0	1255

*1:果肉重量(蛋白質以外の成分も含む)

又、活性は、試料を3分間口に含んだ後水で口をすすぎ、0.02Mクエン酸溶液を味わった時の甘さを各種濃度のショ糖溶液と比較し、同等の甘さのショ糖濃度を求めることにより測定した。その結果を第3図に示す。第3図から判るように、高純度クルクリンの活性は、0.3Mショ糖の甘さに相当した。

参考例2 (等電点電気泳動)

ファーストシステム (PhastSystem

1 1

TAおよび 6 0 mH ジチオスレイトールを含む 0.4 Mトリス 接衝液 5 ml に溶解した。この溶液を窒素ガス中で 3 7 ℃、2 4 時間インキュベートした。この溶液にヨードアセトアミド 0.2 g を加え、室温で 1 0 分間静置し、続いて、氷水浴中で 6 0 分間静置した。得られる S ーカルボキシアミドメチル化クルクリンをセファデックス G ー 2 5 を用い、2 M 尿素及び 2 mH E D T A を含む 5 0 mH 重炭酸ナトリウム 緩衝液 (pH 8.0) に溶媒を交換し酵素消化の試料とした。

実施例 7 (S-カルボキシアミドメチル化クルク リンの酵素消化)

S-カルボキシアミドメチル化クルクリンのリシルエンドペプチダーゼ消化を、2 M尿素及び2mMBDTAを含む50mM重炭酸ナトリウム緩衝液(pH8.0)中で37℃、17.5時間行った。蛋白質濃度は1 mg/mgで、酵素対基質比が1対120(W/W)である。反応は、HC1を加えpH2.0とすることにより停止した。

また、S-カルボキシアミドメチル化クルクリ

TM、ファルマシアLKBバイオテクノロジー社 製)により、ファーストゲル(Phast Gel IEF5-8)を用いて、高純度クルクリンの 等電点電気泳動を行ったところ、等電点は7.1 であった。

実施例5 (アミノ酸組成)

アミノ酸組成の決定は、ウォーターズ社のピコタグシステム (Waters Picotag system) により実施した。即ち、高純度クルクリンの10μgを1%フェノールを含む6N-HC1により、110℃22時間の条件で加水分解し、得られたアミノ酸をフェニルチオカルパミル(PTC)化して、TSKゲルODS-80TMカラム(直径0.46cm×15cm、東ソー蝌製)を用いたHPLCにより分析した。PTC-アミノ酸は、254nmの吸光度により検知した。

実施例6(Sーカルボキシアミドメチル化クルク リンの調製)

実施例1~4の操作により得られた高純度クル クリン7 嘘を、6 Mグアニジン塩酸塩、2 mME D

1 2

ンのキモトリプシン消化を、上記消化と同じ緩衝液、蛋白質濃度及び酵素対基質比の下、37℃、30分間行った。消化反応は上記と同じ方法で停止した。

さらに、Sーカルボキシアミドメチル化クルクリンのトリプシン消化を、上記消化と同じ緩衝液、蛋白質濃度及び酵素対基質比の下、37℃、3時間行った。消化反応は上記と同じ方法で停止した。実施例8(ペプチドの分離)

実施例 7 により得られた三種類のペプチド混合物は、 T S K - O D S - 1 2 0 T (東ソー㈱製)カラムを用い、 H P L C により分離した。 各ペプチドは、 0. 05% トリフルオロ酢酸を含むアセトニトリルの直線濃度勾配溶出法で溶出した。ペプチドは、 210 nmの吸収により検知され、各ピークが集められた。

リシルエンドペプチダーゼ消化物、キモトリプシン消化物及びトリプシン消化物のHPLC溶出パターンを、それぞれ第4図、第5図及び第6図に示す。

ただし、リシルエンドペプチダーゼ消化物及びトリプシン消化物については、アセトニトリル20%(W/W)までの30分間の直線濃度勾配溶出パターンであり、キモトリプシン消化物については、アセトニトリル10%(W/W)までの45分間の直線濃度勾配溶出パターンである。又、後述するペプチドの名前は、これらのHPLC溶出パターン中のピークの名前に従った。

実施例 9 (アミノ酸組成分析及びアミノ酸配列の 決定)

実施例 8 で得た各ペプチドのアミノ酸組成分析は、ウォーターズ社のピコタグシステム(Waters Picotag system)により実施し、その結果を下記第 2 表及び下記第 3 表に示した。ただし、セリン及びトレオニンは、それぞれ分解による損失を10%及び 5% として補正した値を示した。

アミノ酸配列の決定は、470A アプライド パイオシステムプロテインシークエンサー (Applied Biosystem Protein Sequencer) により行っ

15

第7図に示す通りである。

第7図において、LBP、CH及びTは各々リシルエンドペプチダーゼ、キモトリプシン及びトリプシン消化からのペプチドを、Nは高純度クルクリンのN末端からエドマン分解により決定したアミノ酸配列を示す。

また、実線は、各ペプチドのエドマン分解により同定されたアミノ酸残基を示し、点線は、各ペプチドのエドマン分解により同定されなかったアミノ酸残基を示す。

また、アルファベットとアミノ酸との関係は次の通りである。

	3 文字表記	1 文字表記
アスパラギン酸	Asp	D.
アスパラギン	Asn	N
グルタミン酸	Glu	E
グルタミン	Gln	Q
メチオニン	Met	n .
システイン	Cys	C
セリン	Ser	S

た。即ち、アミノ酸をフェニルチオヒダントイン (PTH) 化して、このPTH-アミノ酸を、T SK-ODS-120Tカラムを用いたHPLC により分析した。その結果を下記第4表及び下記 第5 妻に示す。

カルボキシ末端アミノ酸配列は、カルボキシペプチターゼを用いて次の方法により決定した。高純度クルクリン200μgを、0.1MN-エチルモルホリン酢酸緩衝に、カルボキシペプチターゼAを10μg加え、反応混合物を室温でインキュペートする。反応での一部を、15分、30分、60分及び120分毎に採取する。これらの反応で、カル酢酸を加え蛋白質を沈設離したアミノ酸を、ウォーターズ社のピコタグシステム(Haters Picotag system)により分析した。その結果、カルボキシ末端アミノ酸残基は、グリシンであることが明らかとなった。

以上の方法により決定されたアミノ酸配列は、

16

Gly	G
His	H .
Thr	T
Ala	A
Pro	P
Arg	R
Туг	Ÿ ·
Va 1	V
Ile	· . I
Leu	L
Phe	P
Lys	K
Trp	W,
	(1)
•	/"
	His Thr Ala Pro Arg Tyr Val Ile Leu Phe

第2表 S-カルボキシアミドメチル化クルクリンのリシルエンド ペプチダーゼ又はトリプシン消化物より得られたペプチド のアミノ酸組成

				単位(モ	ルノペプ	チドのモル)
アミノ酸	LEP-2	LEP-3	LEP-5	LEP-6	T-11 ·	クルクリン
Asx (B)		5.4(6)	13.0(12)	2.7(3)	8.9(9)	(21)
G1x (Z)	1.2(1)	3.2(3)	2.4(2)		1.4(1)	(6)
Cys (C)		0.7(1)	2.4(3)	0.8(1)	1.7(2)	(5)
Ser(S)		2.3(2)	3.8(4)	' 1.1Œ	2.5(2)	(T)
Gly(G)		` 2.6(2)	6.9(7)	4.7(5)	4.4(4)	(14)
His (H)		2.2(2)	1.1(1)		1.2(1)	(3)
Thr (T)		3.0(3)	2.0(2)		1.2(1)	(5)
Ala(A)	0.8(1)	3.4(3)	3.7(3)	•	2.8(3)	m
Pro(P)				2.3(2)		· (2)
Arg (R)			3.8(4)	3.4(3)		(7)
Tyr (Y)	1.0(1)	1.0(1)	1.9(2)	1:1(1)	1.9(2)	(S)
Val (V)	1.1(1)	1.7(2)	1.7(2)	2.2(3)	2.5(3)	(8)
Ile(I)		1.0(1)	1.9(2)	0.7(1)	0.7(1)	(4)
Leu(L)	2.1(2)	5.2(6)	3.8(4)	2.1(2)	5.9(6)	(14)
Phe (F)				1.2(1)		Œ
Lys (K)	0.8(1)	0.9(1)	0.9(1)		2.3(2)	(3)
Trp(W)			ND (1)	ND(1)	-	(2)
計	(7)	(33)	(50)	(24)	(37)	(114)
帰属	84-90	1-33	34-83	91-114	54-90	
収率(%)	55.2	72.4	83.0	68.5	31.3	

セリン及びトレオニンは、それぞれ分解による損失を10%及び5% として補正した値を示す。

第3 表 Sーカルボキシアミドメチル化クルクリンのキモトリプシン 消化物より得られたペプチドのアミノ酸組成 単位 (モル/ペプチドのモル)

	_				-	
アミノ酸	сн-нз	CR-4B	CH-5	CH-6	CH-10	CH-13
Asx (B)	2.0(2)*	1.0(1)	3.2(3)	3.0(3)	9.9(11)	1.4(1)
Glx(Z)		2.0(2)	1.4(1)	1.9(2)		0.8(1)
Cys (C)	0.7(1)		0.6(1)		2.3(3)	
Ser(S)	1.0(1)			2.0(2)	4.2(4)	
Gly(G)	2.5(3)	1.1(1)		2.1(2)	6.6(6)	2.2(2)
His (H)				1.8(2)	1.2(1)	
Thr (T)			1.6(2)	1.1(1)	1.7(2)	
Ala(A)	.*			3.1(3)	2.4(3)	0.7(1)
Pro(P)	1.3(1)					1.2(1)
Arg(R)	1.8(2)	1.1(1)			3.3(3)	1.3(1)
Tyr(Y)			1.2(1)	1.0(1)	2.3(2)	1.2(1)
Val (V)	1.2(1)		0.7(1)	0.9(1)	1.9(2)	2.4(3)
lle(I)		0.8(1)	0.8(1)		1.1(1)	1.0(1)
Leu(L)	1.3(1)		1.6(2)	4.2(4)	4.5(4)	2.7(3)
Phe(F)						1.0(1)
Lys(K)			0.8(1)		0.9(1)	0.7(1)
Trp(W)		ND (1) **	•			ND(1)*
8†	(12)	(7)	(13)	(21)	(43)	(18)
帰底	103-114	35-41	22-34	1-21	42-84	85-102
収率(%)	6.1	18.9	17.5	38.1	15.0	19.3

1 9

第4 要 Sーカルボキシアミドメチル化クルクリンのリシルエンド ペプチターゼ及びトリプシン消化物から得られたペプチド のエドマン分解により同定されたアミノ酸残基

		22721				
サイクル	LEP-2 7シ酸 (収率) (pmole)	LEP-3 7シ酸 (収率) (pmole)	LEP-5 7シ酸 (収率) (p mole)	LIP-6 7シ酸 (収率) (p mole)	T-11 7シ酸 (収率) (p mole)	N 7シ酸 (収率) (p mole)
12 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 8 19 20 12 22 24 25 26 27 28 29 30 31 22 33 34	Tyr (3060) Ala (4103) Leu (2016) Val (1987) Leu (901) Gln (1351) Lys (489)	Asp (861) Asn (671) Val (606) Leu (495) Leu (495) Leu (703) Ser (85) Gly (227) Gln (482) Thr (120) Leu (277) His (146) Ala (338) Asp (443) His (67) Ser (22) Leu (154) Gln (133) Ala (119) Gly (81) Ala (58) Tyr (57) Thr (17) Thr (17) Tle (44)	Tyr (405) Gln (496) Asn (50) Gly (139) Arg (56) Gln (138) He (171) Trp (92) Ala (156) Ser (28) Asn (114) Thr (44) Asp (151) Arg (89) Arg (86) Gly (75) Ser (15) Gly (63) Cys (57) Arg (56) Leu (79) Thr (26) Leu (72) Ser (9) Asp (84) Gly (38) Asn (51) Leu (66) Val (28) He (30) Tyr (20) Asp (69) His (7)	Asp (244) Gly (856) Arg (72) Phe (866) Val (1005) Ile (682) Tyr (623) Gly (457) Pro (301) Val (273) Leu (196) Lrp (40) Ser (86) Leu (199) Gly (216) Pro (213) (Asn) Gly (105) Cys (66) Arg (21) Arg (277) Val (12)	Leu (1383) Thr (447) Leu (1053) Leu (1053) Leu (1344) Asn (1028) Leu (615) Val (730) Asn (1028) Leu (615) Val (730) Asn (584) His (204) Asn (599) Asn (758) Asn (758) Asn (809) Asn (758) Asn (254) Gly (298) Sal (201) Cys (150)	Asp (264) Asn (146) Val (232) Leu (106) Leu (118) Ser (15) Gly (35) Thr (16) Leu (77) His (28) Ala (60) Asp (78) His (13) Ser (7) Leu (33) Gln (21) Ala (23) Ala (31)

S-カルボキシアミドメチル化クルクリンのキモトリプシン 消化物から得られたペプチドのエドマン分解により同定され たアミノ酸残基 第5表

2 0

サイクル	CHI-H3 アミノ酸 (収率) (p mole)	CH-4B 7ミノ酸 (収率) (p mole)	CH-5 7シ酸 (収率) (pmole)	GH-6 7シ酸 (収率) (pmole)	CH-10 7シ/酸 (収率) (p mole)	CH-13 アミノ酸 (収率) (p mole)
2 L 3 G 4 P 5 A 6 G 7 C 8 A 9 A	er (1687) eu (2813) 1y (2198) ro (2673) sn (2401) 1y (1596) ys (2302) rg (1553) rg (1735) al (1547) sn (862) ly (150)	Gln (81) Asn (71) Gly (66) Arg (10) Gln (63) Ile (60) Trp (6)	Thr (142) Leu (337) Thr (102) Tile (207) Gln (335) Asn (272) Asn (246) Cys (142) Asn (228) Leu (33) Val (46) Lys (11) Tyr (16)	Asp (2395) Asn (2047) Val (1793) Leu (941) Leu (1165) Ser (132) Gln (797) Thr (273) Leu (596) His (278) Ala (713) Asp (881) His (149) Ser (58) Leu (596) Gln (230) Ala (330) Gly (187) Ala (341) Tyr (118)	Ala (443) Ser (74) Asn (251) Thr (46) Asp (133) Arg (53) Arg (53) Arg (33) Gly (85) Ser (32) Gly (60) Cys (65) Arg (21) Leu (47) Thr (12) Leu (68) Leu (74) Ser (8) Asp (17) Gly (11) Asn (13) Leu (24) Val (6) Ile (3) Iyr (3) Asp (13)	Ala (227) Leu (116) Val (141) Leu (101) Gln (112) Lys (68) Asp (96) Gly (93) Arg (30) Phe (39) Val (74) Ile (20) Tyr (32) Gly (41) Pro (11) Val (7) Leu (3) Trp (3)

^{*} 実測値(配列分析からの結果)
** ND:検出されず。
セリン及びトレオニンは、それぞれ分解による損失を10%及び5% として補正した値を示す。

(発明の効果)

本発明の「味覚修飾物質」は、高純度クルクリンからなる甘味を誘導する物質で、全く新しいタイプの甘味物質として、食品、飲料、飼料、ペットフード又は薬剤などに適宜含有させて用いることができる。

又、本発明の「味覚修飾物質」は、そのアミノ 酸配列が決定しているので、化学的及び遺伝子工 学的手法により、大量に製造することが可能で有 用である。

4. 図面の簡単な説明

第1図は、クルクリゴ・ラチフォリアの果実から水洗、抽出、塩析操作によって得た味覚修飾物質のCM-セファロースイオン交換クロマトグラフィーの溶出パターンを示すグラフである。

第2図は、第1図のピーク(B)の斜線部分に示された画分の、セファデックスG-100分子 よるいクロマトグラフィーの溶出パターンを示す グラフである。

第3図は、本発明の高純度クルクリンからなる

2 3

味覚修飾物質の活性を示すグラフである。

第4図は、S-カルボキシアミドメチル化クル クリンのリシルエンドペプチダーゼ消化により得 られるペプチドのHPLC溶出パターンを示すグ ラフである。

第5図は、Sーカルボキシアミドメチル化クルクリンのキモトリプシン消化により得られるペプチドのHPLC溶出パターンを示すグラフである。

第6図は、Sーカルボキシアミドメチル化クル クリンのトリブシン消化により得られるペプチド のHPLC溶出パターンを示すグラフである。

第7図は、クルクリンのアミノ酸配列を示す模式図である。

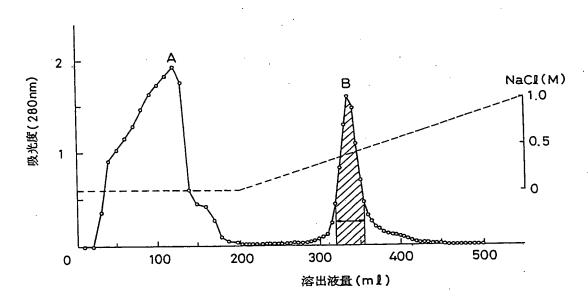
特 許 出 願 人 栗 原 良 枝 旭電化工業株式会社

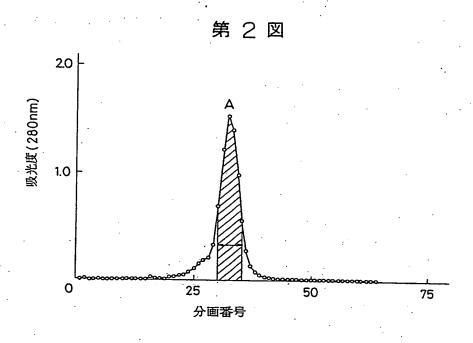
代理人 弁理士 羽 鳥

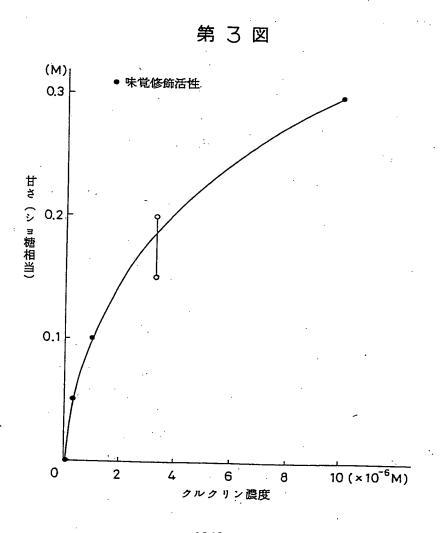
羅劉

2 4

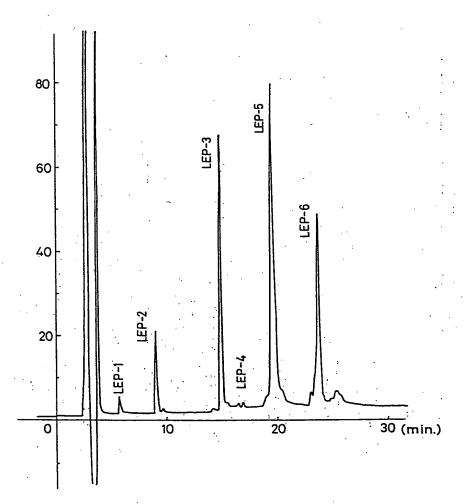
第 | 図

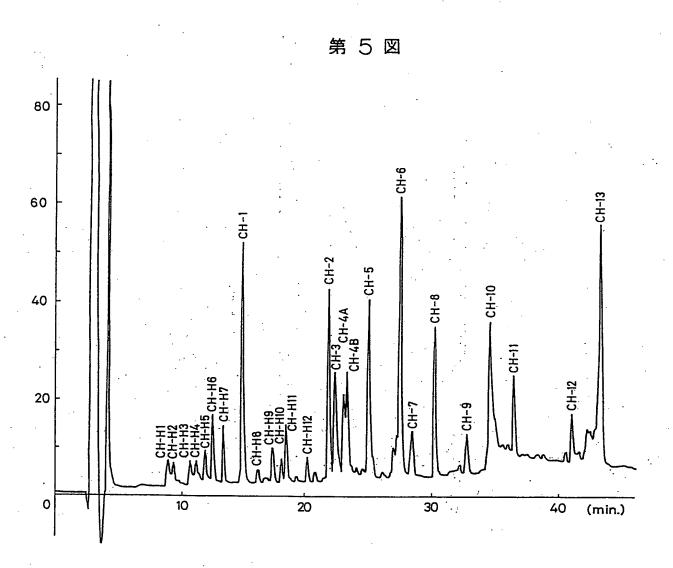


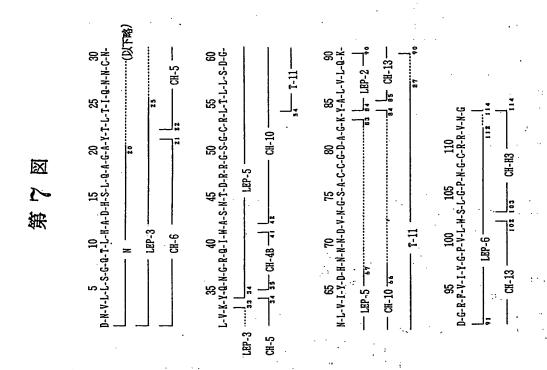


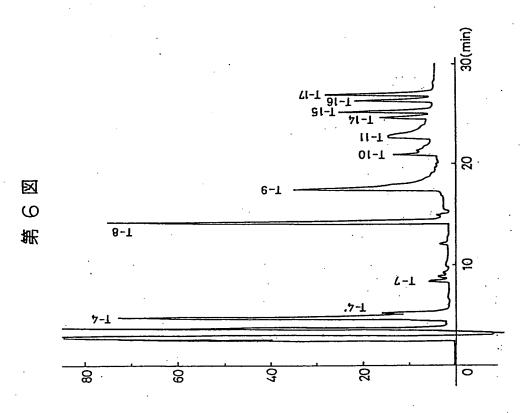












手統補正想



平成2年10月11日

特許庁長官 植 松 敏 殿

1. 事件の表示

特願平1-330794号

2. 発明の名称

味覚修飾物質

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人 栗 原 良 枝 (038) 旭電化工業株式会社

4. 代 理 人

東京都港区南青山一丁目15番16号

ヤマシロヒル 8 階

⊕107

☎ 03-479-2531**6**€

(7653) 弁理士 羽 鳥



5. 補正命令の日付

自発補正(出願日から1年3ヶ月以内の補正)

6. 補正の対象

明細書の発明の詳細な説明の欄。

方式 雷

1

7. 補正の内容

(1)第2頁最終行の「ひがんばな科きんばいざさ 属」を「きんばいざさ科」と補正。

以上

5